

P2-36-8 ターナー女性の妊娠出産—自然妊娠および卵子提供による妊娠を経験して

獨協医大

茂木絵美, 望月善子, 根岸正実, 添田わかな, 深澤一雄

【はじめに】ターナー症候群(以下TS)は自然に二次性徴をきたした症例では妊娠例が認められているが、大多数は卵巣機能不全により妊孕性はない。しかし、生殖補助医療の進歩により卵子提供による妊娠例が報告されている。今回当科で出産したターナー女性2例について報告する。【症例】症例1:12歳初経。15歳時に低身長を主訴に小児科受診しTSモザイク型(46XX/45XO)と診断。21歳、過多月経のため当科思春期外来受診。以後月経異常、循環器・耳鼻科・骨量など成人ターナー女性の管理。33歳結婚し、34歳で自然妊娠。妊娠時139.3cm, 36.5kg。妊娠35週、FGRと低身長による腹部圧迫感増強のため管理入院。38週3日、自然陣発したが、胎児機能不全とCPDのため緊急帝王切開で男児1890g Ap:5/9を出産。症例2:9歳時に低身長のため小児科受診しTS(45XO)と診断。20歳時に原発性無月経のため当科思春期外来受診。146cm, 41kg。以後カウフマン療法を施行。30歳時結婚。31歳時の心精査で軽度の僧帽弁逸脱症を指摘。32歳で米国にて卵子提供を受け、2絨毛膜性2羊膜性双胎を妊娠。33週、重度の浮腫のため管理入院。その後も浮腫と低Alb血症の増悪あり、34週4日帝王切開にて第1子女児2902g Ap:8/10、第2子男児1878g Ap:9/10を出産。産褥1日目に産褥心筋症を発症し循環器内科転科となり、産褥22日目に退院となった。【考察】ライフステージを通してターナー女性のケアに取り組んでいるが、ターナー女性の妊娠の可能性が広がりQOLは大きく変化している。不妊治療の開始前に周産期合併症も含めて、リスク評価と本人、家族への情報提供を入念に行う必要があり、妊娠時には循環器内科との連携が重要であると考えられる。

一般演題
11日(土)

P2-36-9 卵子提供により妊娠したモザイクターナー症候群の一例

聖路加国際病院女性総合診療部

山田梨紗子, 塩田恭子, 小野木さちえ, 和泉紀子, 赤枝 俊, 水野吉章, 真島 実, 林 良宣, 齊藤理恵, 山中美智子, 百枝幹雄

【緒言】Turner 症候群では原発性卵巣機能不全による不妊を呈することが多く、自然妊娠率は2%程度とされている。近年、高度生殖医療の発達により、卵子提供によるTurner 症候群患者の妊娠・出産例が報告されるようになった。Turner 症候群患者の妊娠では、妊娠高血圧症候群、妊娠糖尿病などの周産期合併症の増加や、甲状腺機能低下症の合併、高い流早産率等、様々な周産期の問題が報告されている。中でも大動脈解離は致死的な合併症として注意を要する。一般的な周産期死亡率が1万人に1人であるのに対し、Turner 症候群患者の妊娠において、大動脈解離で死亡する割合は100人に2人とされている。今回我々は、モザイクTurner 症候群患者における、卵子提供による妊娠例を経験したので報告する。【症例】34歳未妊婦。身長153cm, 体重43kg。10代から月経異常があり、カウフマン療法等を行っていた。妊娠希望があり卵巣機能不全の精査を行ったところ、モザイクTurner 症候群45,X(5)/47,XXX(1)/46,XX(174)と診断された。タイで卵子提供を受けて妊娠。妊娠9週で初診。心血管系の合併症としては大動脈のpseudocoarctationと門脈閉塞に伴うcavernous transformationを認めた。大動脈解離の予防目的に妊娠20週よりピソプロロール内服を開始した。現時点で合併症なく経過している。【考察】Turner 症候群患者の妊娠、出産においては高い流早産率や心血管系合併症など様々な周産期合併症が報告されている。個々の症例において妊娠、分娩に関するリスク評価が必要である。本症例における分娩転帰に加え、Turner 症候群患者の妊娠、分娩に関し文献的考察を含め報告する。

P2-37-1 乳癌患者における、妊孕性温存効果の向上を目的とした卵巣組織および卵子同時凍結保存法(combined procedure)に関する検討

聖マリアンナ医大

高江正道, 杉下陽堂, 吉岡伸人, 阿部恭子, 遠藤 拓, 川原 泰, 高橋由妃, 岩端秀之, 西島千絵, 洞下由記, 河村和弘, 鈴木 直

【目的】近年、悪性腫瘍に対する治療成績の向上によって多くの生命が救われているが、特に乳癌患者において、化学療法による早発卵巣不全や長期のホルモン療法による加齢性の不妊症が問題点の一つとして注目されており、治療開始までの短期間に妊孕性温存を希望する患者が増加している。当院では倫理委員会審査のもと、2010年より『悪性腫瘍患者に対する妊孕性温存を目的とした卵巣組織および卵子凍結保存』を行っており、治療によって発症する不妊症に直面した悪性腫瘍患者の妊孕性温存に対応している。当院では卵巣組織凍結を行う際に妊孕性温存効果の向上を目的として、卵子も同時に回収するcombined procedureを行っていることから、本演題ではその現状について報告する。【方法】2010年10月から2014年9月までに卵巣組織凍結を施行された乳癌患者の診療録を後方視的に調査し、combined procedureを行った際の採卵個数に影響を与える因子および月経周期による差異について検証した。【成績】症例数は35例、平均年齢は33.7(±3.7)歳、平均血中AMH濃度は3.5(±2.4)ng/mlであった。卵巣組織は約1cm四方の卵巣皮質にトリミングし、卵巣あたり平均16.1(±4.9)片凍結し、さらに摘出卵巣より平均7.7(±5.9)個の卵子を回収した。回収された卵子数は血中AMH濃度と患者年齢に強く相関したが、卵子生存率や卵子成熟率を含めて月経周期による差を認めなかった。【結論】本研究によって、乳癌患者におけるcombined procedureは月経周期のどの時期においても効果的に施行し得ることが示された。このことは、卵巣組織凍結保存の手術時期を選ぶことが容易ではない患者にとって、大きな福音であると考えられた。